



TITLE:

金代の物力錢に就て(上)

AUTHOR(S):

小川, 裕人

CITATION:

小川, 裕人. 金代の物力錢に就て(上). 東洋史研究 1940, 5(6): 420-437

ISSUE DATE:

1940-10-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/145716>

RIGHT:

金代の物力錢に就て(上)

小 川 裕 人

一、物力錢の性質

二、物力錢の査定方法

三、不公平可能とその救済、(附)課克戸の推排

四、制度採用の意義

五、結 論

滿蒙に建國した北族國家の漢族を包含する形態は、

初は來降や俘掠による奴隸或は徙民として、後には

土着漢人として主としてその社會の文化的經濟的部

門の擔當者となし、その數も代を降るに隨ひ次第に

増大する。又その國家が漢人社會に依存する形式や

その統治方法は、力による掠奪的征服者のなものよ

り、漢風制度の整備による平和的組織的なものへと

變遷する。當初は前代の遺制そのまゝを採用し、漸

次中京正統國家の傳統に沿はんとする傾向を有する

に至る。これも初は表面的形式的であるのを常とするが、次第にその國家の實情に即した制度へと推移する。こゝに至ると北族は實質的に漢化すると共に、その採用した漢風制度も北族的な規定を受け、その北族的運用が始る。物力錢法も金國の右の如き推移の一指標と見られる。

一、物力錢の性質。

物力錢に就ては金史卷四七食貨志二、租賦のところ

計民田園、邸舍、車乘、牧畜、種植之資、藏鏹之數、

徵錢有差、謂之物力錢、

とある。物力錢は人民私有の田園、邸舍、車、畜類種

植之資(穀類殊に粟を含む)や藏錢の多寡等一般財産

を課税標準とする一種の税と見るべきものである。宋

代等に於て一般資力を指して言つた單なる「物力」と

は自らその性質を異にするものである。然し金史に於てはこれを物力錢といふ他に單に「物力」と略記されたことの多かつたことも勿論である。食貨志序(卷四六)に

算其田園、屋舍、車馬牛羊、樹藝之數、及其藏鏹多寡、徵錢、曰物力、

とあるのはその一例である。

この課税の控除項目としては、食貨志租賦のところに凡民之物力所居之宅不預、猛安謀克戸監戸官戸所居外、自置民田宅則預其數、墓田學田租稅物力皆免、とあり、又食貨志通檢推排(卷四六)のところに

凡監戸事產除官所撥賜之外、餘凡置到百姓有稅田宅皆在通檢之數、

とある。民人の現住せる居宅が一般に控除されたことは疑ない。その他軍戸たる猛安謀克戸、良人の官に没入されて宮籍監に隸する所謂監戸、奴婢の官に没入されて太府監に隸する所謂官戸等が、官より授賜された田宅は半官的な物件として物力錢課徴の標準とならず、私有の收益ある田宅のみを課税標準の中に加へんとするのが法の精神のやうである。又禮的意義を有

し、非生産的に使用される墓田や、その生産の結果が特殊な目的に供せられる學田等は税と共に物力錢も免除された(卷四七租賦)。これを要するに物力錢の課税標準となるものは、民人私有の物件で、その中、現住居宅は生活に必需なものとして控除されたのである。

更に章宗大定二十九年以後は備荒貯蓄獎勵のため積粟が物力錢を免除され、明昌元年以後は田税との關係上一般民地物力が十分の二を控除された。されば物力錢の課税客體として前述の邸舍或は屋舍の中、本人の居宅が控除され、田園の見積價格の十分の二、及び種植の資の中積粟が免除されたのである。

官より特別なる目的の下に賜與された田宅は控除されること前述の如くであるが、官命を帯びて宋等外國に使した場合に受けた金銀帛等に就てはその額に應じて物力錢を増さねばならなかつた。食貨志序(卷四六)には

近臣出使外國歸、必增物力錢、以其受饋遺也、とある。又梁肅傳(卷八九)には

凡使宋者宋人致禮物、大使金二百銀二千兩、副使半之、幣帛雜物稱之、及推排物力、肅自以身爲執政、

昔嘗使宋、所得禮物多、當爲庶民率先、乃自增物力六十餘貫、論者多之、

とあつて、この種の物力錢の加算が六十餘貫の多きに達したのもあつたやうである。然し大定二十九年六月には國信使の副使は物力錢の加算を免ぜられるに至つたやうである。(通檢推排)

物力錢の負擔者の範圍に就ては食貨志序に

物力之徵、上自公卿大夫下逮民庶、無苟免者、

とある。公卿等の高級官吏より庶民に至るまで、何れもその課税を免れなかつた。然し前述の如く猛安謀克戸等が官より分賜された田宅は、この税の課税を免除するのが法の精神であつた上に、猛安謀克戸の物力に就ては大定二十二年に至つて貧富を推し、土地牛具奴婢の數を驗して上中下三の戸等を分ち、差役を課する標準としたこと後述の如くであるから、別に物力錢は必要とされなかつた如くである。されば物力錢を課せられたものは、主として猛安謀克に編成されざる漢人及びこれに準すべき渤海人であつたやうである。然らば物力錢とその課税標準たる産業(財産)價格との比率はどの位であつたであらうか、通檢推排のところには

大定四年の通檢のことを記して

時諸使往往以苛酷多得物力爲功、弘信檢山東州縣尤爲酷暴、棣州防禦使完顏永元面責之、曰朝廷以正隆後差調不均、故命使者均之、今乃殘暴妄加民產業數倍、一有來申訴者則血肉淋漓、甚者即殞杖下、此何理也、弘信不能對、故惟棣州稍平、

と言つて居る。未だ物力錢査定準則の確立せざる當初に於ては、その査定の任命を受けた通檢使の中には、徒に多額の査定を以て功と考へ、苛酷にも民産の數倍を加へんとするものさへあつた。然し斯くの如きものは決定額となる筈はなく再査定の行はれたことは勿論である。通檢推排の大定五年のところには、

有司奏、諸路通檢不均、詔再以戶口多寡貧富輕重、適中定之、

とある。然るに梁肅傳(卷八九)には

(大定)四年通檢東平大名兩路戶籍物力稱平允、他使者所至皆以苛刻增益爲功、百姓訴苦之、朝廷勅諸路以東平大名通檢爲準、於是始定、

とある。梁肅の大名、東平兩路に於ける通檢が、諸路通檢の準據となつたやうである。梁肅は奉聖州の出身

だが幼より學に勤め、讀書に勵んだ勤直の士であつた。天眷二年進士となつてより金國漢地の行政官として歴任し、殊に財政經濟方面に於て功績の多かつた人物である。曾て山東西路（東平府所在）轉運副使となつたこともあり、大名路に於てはその少尹を攝したこともあつた。大定四年通檢の當時は河北東路（河間府所在）轉運副使の職に在つた。彼が漢地行政に習熟し、殊に大名東平等の地方の漢人の經濟狀態や習俗に通じて居たことは想像に難くない。彼の大名東平に於ける物力錢の査定が當時の漢人社會に妥當なものとして他の諸路の準據となつたことは不思議でなからう。

然るに東平、大名は齊國建設當時の劉豫の本據地で、當時齊國に房繕稅や商人の財産を課稅標準とする免行錢等の稅が設けられたと推せられるが、その稅率は何れも五釐即ち二十分の一であつたやうである。これは當時の漢人社會に於ける財産課稅の妥當な率であつたのであらう。宋代の財産稅たる宅稅地稅徵收の趣意を都市のみに止めず、地方農民にまで及ぼしたと推せられる金國の物力錢の査定に於ても、梁肅は大體この齊國の二十分の一財産課稅を標準として定めたのではな

からうか。（この點に於ては尙後述すべし）

斯くの如く物力錢は獨立した一個の稅であるが、更に賦役や免役錢を課する標準ともなつたのである。食貨志賦稅のところには

遇差科必按版籍、先及富者、勢均則以丁多寡定甲乙、有橫科則視物力、循大至小均科、其或不可分摘者率以次戶濟之、

とある。こゝに物力に就て、大小といふ他に次戸とある點から遼や宋の如く戸等の法が行はれた如く見える。更に北行日錄には宋乾道五年（金大定九年）十二月十二日のことを記して

或云新制大定十年爲始、凡物力五十貫者招一軍、不及五十貫者率數戶共之、下至一二千者亦不免、每一軍費八十緡納錢於官以供此費、

と言つて居る。これは胙城縣のことであるが、こゝに言ふ大定新制に於ては、この地方では物力錢五十貫以上のものと五十貫に及ばざるものと、一、二千のものとの三等級に分けて賦役が課されることになつて居たやうである。又、後掲食貨志戸口の泰和七年六月の勅には中物力戸が役を避けて逃亡するもの多いことを言

つて居るが、こゝにも上、中、下の三戸等のあつたことを疑はしめるものがある。更に食貨志租賦、興定四年十二月のところに

鎮南軍節度使溫迪罕思敬上書言、今民輸稅、其法大抵有三、上戸輸遠倉、中戸次之、下戸最近、然近者不下百里、遠者數百里、道路之費倍于所輸、而雨雪有稽違之責、遇賊有死傷之患、不若止輸本郡、令有司檢算倉之所積稱屯兵之數、使就食之、若有不足則增歛于民、民計所歛不及道里之費、將忻然從之矣、とあつて、當時上、中、下の三戸等のあつたことを明らかに示して居る。金代の戸に三等級のあつたことは疑ない。これも勿論こゝに問題とする物力錢の多寡を標準として定められたものなること疑ないが、賦役を課する便宜の上からこれを分つたのであらう。食貨志戸口のところには

有物力者爲課役戸、無者爲不課役戸とある。前述の三級の戸等はこの物力ある課役戸に關するものであること疑ない。この三等級の下に更に不課役戸が存したのである。

この戸等は實役を課する便宜のために分けられたも

ので、附加税たる役錢の課賦には矢張り、貫數が問題となり、戸等は重きを成さなかつた時もあつた如くである。後述の如く軍須錢を課するのに、物力錢を標準として、「每貫徵錢四貫」「每貫徵錢二貫」等と規定されて居るのはその一斑とすべきであらう。

次に物力錢を標準とした課調に就て見よう。租賦のところを見ると

凡叙使品官之家並免雜役、驗物力所當輸者、止出雇錢進納、

とあつて官吏にして雜役を免ぜられたものは、その役に關する雇錢を分擔するが、その課徴の標準は物力錢であつたやうである。

又行政官廳の司吏や各縣の警備に當る弓手の願錢が司吏錢、弓手錢として物力を標準として課賦されたことは後述の如くであるが、自治的團體の坊正や里正の願直も亦物力に準據して差科されたやうである。戸口(卷四六)のところに

凡坊正里正、以其戸十分內取三分、富民均出願錢、募強幹有抵保者充、人不得過百貫、役不得過一年、とある。

この他地方の馬政に關しても物力錢が顧慮されたやうである。兵志（卷四四）には

明昌五年散驂馬、令中都西京河北東西路、驗民物力分畜之、又令它路民養馬者、死則於前四路所養者給換、若欲用則悉以送官、此金之馬政也、然每有大役必括於民、及取群官之餘騎、以供戰士焉、

とある。地方民に驂馬を分畜せしむるにも物力が準據とされた。

次に司吏、弓手、その他黃河夫、軍須、鋪馬、牛夫、桑皮故紙等の錢に就て見ると、食貨志序（卷四六）には

物力之外、又有鋪馬、軍須、輪庸、司吏、河夫、桑皮故紙等錢、名目瑣細不可殫述、

とあるが、これ等の錢税を必ずしも物力錢と關係なきものと考へる必要はない。兵士（卷四四）養兵之法、大定三年のころには

南征軍士、每歲可支一千萬貫、官府止有二百萬貫、外可取於官民戶、此軍須錢之所由起也、時言事者、以山東河南陝西等路、循宋齊舊例州縣司吏弓手、於民間驗物力均敷顧錢、名曰免役、請以是錢贍軍、至是省具數以聞、詔罷弓手錢、其司吏錢仍舊、

とあつて、司吏錢、弓手錢は金が、宋齊の舊例に循つて、弓手司吏の顧錢財源のため民間の物力を標準として徴した免役錢であつた。弓手錢はこの時以來罷められた如くであるが司吏錢はこの後も引き續き行はれたのであらう。尙弓手錢に就ては胡礪傳（卷一二五）に皇統年間のこととして

改同知深州軍州事、加朝奉大夫、郡守暴戾蔑視僚屬、礪常以禮折之、守愧服、郡事一委于礪、州管五縣、例置弓手百餘、少者猶六七十人、歲民錢五千餘萬爲顧直、

とある。弓手に給する斯くの如き顧錢が免役錢として物力錢を準據として一般に課されたのであらう。

次に鋪馬錢や牛夫錢に就て見ると、食貨志（卷四七）租賦大定二十一年九月のころには、

近官路百姓、以牛夫充遞運者、復於它處未嘗就役之家、徵錢償之、

とあり、同二十三年のころには

宗州民王仲規告乞、徵還所役牛夫錢、省臣以奏、上曰、此既就役復徵錢於彼、前雖如此行之復恐所給錢未必能到本戶、是兩不便也、不若止計所役免租稅及鋪

馬錢爲便、其預計實數以聞、若和雇價直亦須裁定也、有司上其數、歲約給六萬四千餘貫計折粟八萬六千餘石、上復命自今役牛夫之家以去道三十里內居者充役、とある。官路に近き百姓を牛夫として遞運に充てゐるに就き、その願錢を一般人民をして償せしめた。これが牛夫錢と稱せられたもので、所謂鋪馬錢は驛馬に關するものでこれと同性質のものであること勿論である。牛夫錢鋪馬錢共に地方的ではあつてもこれを民に徴するには物力錢を標準としたものであらう。

河渠志（卷二七）大定二十九年十二月のところに

工部言、營築河堤、用工六百八萬餘、就用掃兵軍夫外、有四百三十餘萬工、當用民、遂詔命去役所五百里州府差願、於不差夫之地、均徵願錢、驗物力科之、每工百五十文、外日支官錢五十文、米升半、とあるのは、河夫錢の性質を推せしむるに足るであらう。

又養兵の法、承安三年のところに、

承安三年以軍須所費甚大、乞驗天下物力均徵、擬依黃河夫錢例、徵軍須錢、驗各路新籍物力、每貫徵錢四貫、西京、北京、遼東路每貫徵錢二貫、臨潢、全

州則免徵、周年三限送納恐期遠、遂制作半年三限輸納、

とあつて（黃）河夫錢も物力錢を驗して徴されたものであらう。

所謂軍須錢もこゝに至つて物力錢一貫に付き西京、北京、遼東三路に於ては二貫、他の諸路に於ては四貫を徵する新規定が定められたやうである。軍須錢の名は前掲養兵之法、大定三年のところに既に見えて居て、當時は官民戸より徵取した臨時の軍費であつた。然し當時と雖もこれが大體物力を標準として課されたことは疑なからう。食貨志租賦大定三年のところに

詔曰、朕比以元帥府從宜行事、今聞河南陝西山東北京以東、及北邊州郡調發甚多、而省部又與他州一例征收賦役、是重擾也、可憑元帥府已取者例蠲除之、

とある。當時戰亂の未だ止まざる際なれば中央政府の最高行政官廳なる尙書省の征收賦役の他に、出先軍部が臨時の調發をなすことも多かつたやうであるが、これ等も何れも物力を標準として徴されたものであらう。金が軍事關係の賦役を物力を標準として課したことは相當早くからのやうである。大金國志卷十一、熙

宗紀皇統三年のところに

金國民軍有二、一曰家戸軍、以家產高下定、二曰人丁軍、以丁數多寡定、諸稱家戸者、不以丁數論、故家日至於一絶、人丁至於傭賤、俱不得免也、陳氏婦姑棄市、國人哀之、

とあり、又

雲中家戸軍女戸陳氏婦姑、持產業契書、共告於元帥府、以父子俱陣亡、無可充軍、願盡納產業於官、以免充役、元帥怒其沮壞軍法、殺之、

とある。軍人を徴するにさへ物力を以てし、丁男なき女戸にも物力あるが故にこれを課するに至つた如くであるから、他の一般調發等の經濟的賦課が、物力を標準としてなされたことは想像に餘りあるであらう。斯くの如き臨時的經濟的賦課が一般化均衡化され、制度化されたものが後の軍須錢であらう。而して斯の如き軍須的賦課は可成り多額に上り、前掲の如く北行日録の記事にあるが如く八十貫に相當する役が物力五十貫のものにも課され、前掲養兵之法、承安三年の記事には、軍須錢が物力錢一貫に付き、四貫も徴され、物力錢より軍須錢が多く四倍に達して居る。この軍須錢は

金の國運傾き頻年の戰爭の爲め、益々加徴されて著しく民力を壓迫するに至つた、宣宗紀（卷一五）興定元年冬十月のところに

上謂宰臣曰、朕聞百姓流亡、逋賦皆配見戸、人何以堪、又添徵軍須錢太多、亡者詎肯復業、其并議除之、宰臣請命行部官闕實蠲貸、已代納者給以恩例、或除他役、或減本戸雜征四分之一、上曰、朕於此事未嘗去懷、其亟行之、とある。

物力を標準とする課役は種々の方面に及び、銅鑛産出の地方に於ける鑛石探掘の勞役も、物力を以て科差されることがあつた。錢幣（卷四八）に

章宗大定二十九年十二月鴈門五臺民劉完等訴、自立監鑄錢以來、有銅鑛之地、雖曰官運、其願直不足則令民共償、乞與本州司縣均爲差配、遂命甄官署丞丁用楫往審其利病、還言、所運銅鑛民以物力科差濟之、非所願也、其願直既低、又有剝剝之弊、

とある。金が銅錢の不足に苦んだことは周知のことであるが、世宗一代之間は紙幣たる交鈔の發行を抑止し、銅錢本位の實を全からしめんために銅錢の鑄造

に努力し、その不足を緩和せんとした。然し金國內は銅の產出少く、その苦心せる鑄錢も匹逼せる金融界の需要を充足するには困難を感じた。金はあらゆる手段を盡して銅の蒐集、銅冶の開發に力めたのである。然しその効果も思ふやうには擧らなかつた。章宗即位するや銅鑛採集の困難、銅錢不足の弊を察して銅本位制の固執を放棄して銅錢の鑄造を停止し、鈔法を改正して交渉の發行を多くし、以て金融界の需要に應ぜんとした。章宗時代の鈔法も、初は兌換を許し、その發行額も制限して見錢より多からしめざることとし、専ら經濟界の事情を顧慮して、交鈔により銅錢の不足を補はんと意圖して財政的發行を抑へんとしたやうである。然し交鈔が、官吏や兵士の俸給や戍邊の軍須にも當てられるに至り、その發行が財政的に左右され發行制限令もその實を失つた。大鈔即ち多額交鈔流通の初より困難なりし狀態より見て、當時の經濟界の發達や信用狀態に於ては少鈔は銅錢の不足を補ふ意味に於て需要されるが、大鈔はこれと必要とする程度には達して居なかつたやうである。されば財政的に應じて多額に發行される大鈔の信用は次第に下落し、從

て交渉の發行はあつても藏錢は銅錢によつて行はれ、依然として銅錢不足の歎は後を絶たなかつた。錢幣(卷四八)明昌五年三月のところには、

宰臣奏、民間錢所以艱得以官豪家多積故也、在唐元和間嘗限富家錢過五千者死、王公重貶沒入、以五之一賞告者、上令參酌定制令官民之家以品從物力限見錢多不過二萬貫、猛安謀克則以牛具爲差不得過萬貫、凡有所餘盡令易諸物收貯之、有能告數外留錢者、奴婢免爲良傭者出離、以十之一爲賞、餘皆沒入、

とある。遂に銅錢蓄藏の制限令は出たが、これも物力を準據として行はれたやうである。更に女真人の生活問題にも關聯して官吏や兵士の數の漸増、その俸給額の増加や、引き續く戰亂による軍須の激増等の結果、財政の膨脹はその極に達し、政府又その困難を糊塗せんとして、支出を多く交鈔の發行に頼るに至つた。交鈔流通の滯滯、その價值の下落、物や錢の騰貴鈔による財政膨脹は加速度的に進んだ。當時の經濟界の到底消化し得ざる如き多額の大鈔を濫發するに至つた。その對策として交鈔回收のために種々の手段が構ぜられた。今一二の例を擧げると錢幣(卷四八)貞祐三年には

河東宣撫使胥鼎上言曰、今之物重在於鈔室、有出而無入也、雖院務稅增收數倍、而所納皆十貫例大鈔、此何益哉、今十貫例者民間甚多、以無所歸、故市易多用見錢、而鈔每貫僅直一錢、曾不及工墨之費、臣愚謂宜權禁見錢、且令計司以軍須爲名、量民力徵歛、則泉貨流通而物價平矣、

とあり、又貞祐四年八月のところには

既而隴州防禦使完顏窩及陝西行省令史惠吉繼言卷法之弊、寓請姑罷印造以見在者流通之、若滯塞則驗丁口之多寡物力之高下而徵之、吉言云々

とある。斯くの如き交鈔の強制的回収にも物力が準據となつて居る。

桑皮故紙錢も亦これ等と同様に物力錢の多寡に準據して徵されたものではあるまいか、これに就ては錢幣卷四八興定元年五月のところ

以鈔法屢變、隨出而隨壞、製紙之桑皮故紙皆取于民、至是又甚艱得、遂令計價但徵寶券通寶、名曰桑皮故紙錢謂可以免民輪輓之勞而省工物之費也、

とある。交鈔の濫發やその價值下落のため、國庫の支償はず、これを救済せんとして貞祐寶券貞祐通寶等頻

りに交鈔を改作し幾度か鈔法の更改をなしたが、そのため工費のみならず造鈔の材料に窮し、造鈔手數料たる工墨錢の徵收を以て足れりとせず、造鈔の材料たる桑皮故紙の課賦をさへ取てするに至つたが、これに至つて更に直接鈔を徵收してこれに代ふるに至つた。高汝礪傳(卷一〇七)には

汝礪言、臣聞國以民爲基、民以財爲本、是以王者必愛養基本、國家調發河南爲重、所徵稅租率常三倍于舊、今省部計歲收通寶、不放所支、乃于民間科歛桑皮故紙錢七千萬貫以補之、^⑨

とある。金末には一般稅額數の激増と伴つて桑皮故紙錢の徵收も七千萬貫の多きに上つて居る。

以上の如く見來ると物力錢を標準として課徵された賦役や免役錢的の附加錢稅は非常に多く殊にそれは時代が降り金の國運の傾き財政軍須の激増と共に益々苛重となつて居る。然るにその本稅たる物力錢は増加の傾向は更になく、却て漸減の趨勢を示して居ること後述の如くである。(勿論これは金室の方針に出づるものであることは言ふまでもない。)

されば物力錢はその稅としてよりは寧ろ賦役や附加

税錢の課徴標準として、より大なる意義の存するものである。泰和六年十一月には諸州府物力差役式さへ定められて居る。物力錢の査定に際しても、その金額の大小は大した問題でなく、負擔の均衡を得させることが重大問題であつたのである。

金國物力錢額の知り得るものは、

大定十五年 三〇五、^萬餘、

貫 文

同 二十七年 三〇二、二七一八、九二二、

明昌 六年 二六〇、四七四二、

承安 三年 二五八、六七〇二、四九〇、

で時代を降るに従ひ漸減の傾向がある。これは金室が物力錢を財政的税と考へずに、差調の標準として、その負擔の均衡を得しめんがために特に注意を拂つたためである。通檢推排には大定二十七年に推排使が前年推排の物力錢額を上奏した時の事を記して

奏、李晏等所定物力之數、上曰、朕以元推天下物力錢三百五萬餘貫、除三百貫外、令減五萬餘貫、又減不及數、復續收二萬餘貫、即是實二萬貫爾、而曰、

續收何也、對曰、此謂舊脫漏而今首出者及民地舊無力耕種而今耕種者也、上曰、通檢舊數止於視其營運

息耗與房地多寡而加減之、彼人賣地此人買之皆舊數也、至如營運此強則彼弱、強者増之弱者減之而已、且物力之數蓋是定差役之法、其大數不在多寡也、朕恐實有營運富家所當出者反分與貧者爾、

とある。物力錢に就ては飽くまで差役の標準としてその重要性を認め、専ら不公平を防いで負擔を均衡ならしめんとし、寧ろ金額の増加するのを恐れた如くである。承安二年の推排に關し議定された事項の中にも

止當從實不必敷足元數

とあつて、實際民力の狀況に従つて査定し、必ずしも既定の金額を充さんとするものではなかつた。

更に後掲泰和八年九月章宗が推排使に與へた諭を見て、物力錢の査定には飽くまで實狀に照して公平にその額を定めんと企圖し、必要金額を充たさんとする態度は少しも認められない。既に財政の窮迫しつゝありし章宗朝の末期にも斯くの如くであるから、この税を財政税と見ざりし金室の一貫した方針が察知されるであらう。

斯くの如く物力錢そのものは金室の政策上全く財政的には伸縮性なき税ではあつたが、これに加附される

賦役や課徴は著しい伸縮性を發揮して、その數額も金國の政治狀態や國運の推移と共に變遷して民生を壓迫することも少くなかつたことは既述の如くである。これが金室の物力錢の査定に慎重ならざるを得ざりし理由である。

二、物力錢の査定方法

物力錢の査定は或は通檢と言ひ或は推排と言はれるが、實は大定四五年の交に行はれたものを通檢と言ひ、それ以後のものを主として推排と言つたやうである。大定四五年には國初の數に據らず、特別の條理により全國を通じて全く新に査定したのでこれを通檢と言ひ、それ以後はその條理のみならず、貫數も大體大定四、五年のものを基礎として新強餘力を推收し、舊弱消乏を排除したので推排と言つたのではあるまいか。

通檢も推排も金國の最高行政官廳なる尙書省の管轄下に劃一的にこれを行ふのを原則として居た。通檢推排（卷四六）には

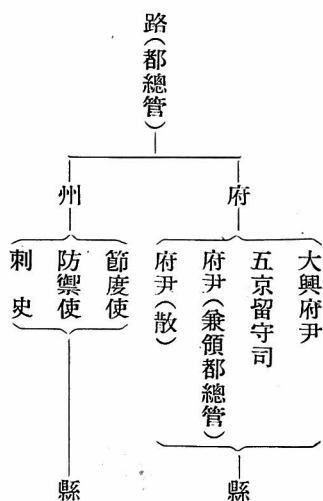
凡規措條理命尙書省畫一以行

とある。尙書省の中でも戶籍、租稅や一般財政經濟方面の事を掌る戶部が主としてその事務を擔當して居た

ことは百官志（卷五五）一に

戶部尙書一員正三品、侍郎二員正四品、郎中三員從五品、員外郎三員從六品、郎中而下皆以一員掌戶籍物力婚姻繼嗣田宅財業鹽鐵酒麴香茶礬錫丹粉坑冶權場市易等事云々

とあるによつて推せられよう。戶部の郎中、員外郎等の中、各一員が物力等の事務を總掌したやうである。然し通檢推排の簿籍を直接監理したのは各地方官であつたやうである。金國に於ては、路が最高の行政區劃で、その統屬の關係は次の如くである。



百官志（卷五七）三を見ると、通檢推排簿を監理したものは、大興府に於ては從六品の推官で、府尹が本路

兵馬都總管を兼領したものに於ても、一般の府に於ても同様に從六品の府判、節度使州に於ては正七品の觀察判官、防禦使州は正八品の判官、刺史州は從八品の判官、大興府に於ても大興、宛平の赤縣は特に從六品の令にこれを掌らしめたやうである。何れもその府州縣内の財政的事務を掌る者ではなく、民政的方面のことを掌る官吏であつたやうである。

以上の如く物力錢の事務的方面のことは戸部や地方官がこれを掌つたが、通檢や推排等査定に際しては通檢使或は推排使といふ特使を任命してこれをなさしめた。今その特使の名の知り得るものを次に擧げると、

大定四年十月、信臣泰寧軍節度使張弘信、河北東路轉運副使梁肅等十三人或は二十四人^⑮

大定十五年九月、濟南尹梁肅等二十六人(通檢推排)
大定二十六年八月、吏部侍郎兼翰林直學士李晏等二十六人、(通檢推排、李晏傳參照)

承安二年十月、吏部尙書賈執剛、吏部侍郎高汝礪が在都兩警巡院に於て先づ推排して諸路の法を示し^⑯諸路には每路差官一員、提刑司官が各之に副した。

泰和八年九月、吏部尙書賈守謙、知濟南府事蒲察張

家奴、莒州刺史完顏百嘉、南京路轉運使宋元吉等、十三員、本路按察司官一員が之に副した。^⑰

右によつて見ると通檢推排使の任命を受けたものは吏部、轉運司の官吏の他に地方官が多いやうである。又金史卷九七、馬百祿傳(卷九七)には

召爲尙書戸部員外郎、與同知河北東路轉運事季京爲中都路推排使、明昌初遷耀州刺史

とある。これは通檢推排章宗大定二十九年のところに以曹州河溢、遣馬百祿等推排壅澍州縣貧乏者

とあるのと同時の記事であらう。水災といふ特別の場合の推排であるが當時李景は河北東路轉運事であつたが、馬百祿は戸部員外郎であつたことが分る。推排使には戸部の役人もあつたのである。

斯く見來ると通檢推排使となりし者は、その官職は一定して居らず、皇帝に信任あり、その使命に適當した才幹ある者が、隨時選任されたやうである。これに吏部の官吏が多く、又承安二年には提刑司、泰和八年には提刑司の改名(承安四年)された按察司等の官吏が副使として任命されて居るのは、この事業が必ずしも財政的性質のものではなかつたことを物語るもの

ではなからうか。

その人員は大定四年には或は十三人とし、或は二十四人として、食貨志と本紀に相違はあるが主使は十三人であつたのではなからうか、十五年及び二十六年の二十六人は主、副使各十三人の總數であらう。承安二年には每路主使一員に提刑司官一員が副し、十三路の推排が行はれたやうである（通檢推排）。泰和八年に主使十三人、按察司官がこれと同數なりしは言ふまでもない。

通檢推排の數が右の如くで、これが各路を分つて行つたとすれば、その路數は十三であると見ねばならない。十三路とは、上京、遼東、北京、西京、中都、河北東、河北西、河東南、河東北、山東東、山東西、南京、京兆（陝西）等の十三路であり、咸平路は遼東路に、大名路は山東西路或は河北東路に含められたのではあるまいか。

斯くの如き特使の通檢推排に際し、地方行政長官がその管轄區内に於て關係したことは勿論である。完顏永元傳（卷七六）には

轉棧州防禦使、泰寧軍節度使張弘信通檢山東、專以

多得民間物力爲功、督責苛急、永元面責弘信曰、朝廷以差調不均立通檢法。今使者所至以殘酷妄加農民田產、簞擗百姓有至死者、市肆賈販貿易有贏虧、田園屋宇利入有多寡、故官子孫閉門自守使與商賈同處上役、豈立法本意哉、弘信無以對、於是棧州賦稅得以實自占、

とあつて、特使たる張弘信の棧州通檢に防禦使永元が意見を加へて居る。

然し地方官と雖もその管轄區内の各戸の經濟狀態を知悉して居たわけではないから、本戸の申告や地方人の推唱に注意を拂つたことは言ふまでもない。只斯くの如き申告、推唱に任せることなく中央政府より特使を派遣してこの事を主宰せしめたことは注意すべきであらう。通檢推排泰和四年の物力隨時推收の法に關する記事を見ても

遂定典實實業逐時推收、若無浮財營運應除免者、令本家陳告、集坊村人戶推唱、驗實免之、造籍後如無人告一月內以本官文牒推唱定標附于籍、

とあつて、本家の陳告や坊村の推唱に注意を拂ひつゝ、官吏をして實を驗して査定せしめんとした態度が

窺はれよう。更に泰和八年九月の推排使派遣の際の章宗の上諭には

上召至香閣親諭之曰、朕選卿等隨路推排、除推收外、其新強消乏戸雖集衆推唱、然消乏者勿銷不盡、如一戸物力三百貫今蠲免二百五十貫猶有未當者、新強勿添盡量存其力、如一戸可添三百貫而止添二百貫之類、卿等各宜盡心、一推之後十年利害所關、苟不副所任罪當不輕也、

とあつて、物力錢の査定には飽くまで、特使たる推排使の妥當な裁量に信頼せんとする金室の方針が察知される。

次に物力錢査定の時期に就て見ると、既記の如く國初太宗（天會初頃）その占籍の行はれてより四十年を経て世宗大定四年に至り新規に通檢が行はれ、その後大定年間には十五年、二十六年の兩度、章宗朝に入つては承安二年、泰和八年の兩度に全國一齊にこれを行つた。大抵農閑期に入らんとする九、十月頃着手しその結果の奏上されるのは翌年の半過ぎのやうである。

されば大定五年（皇紀一八二五）、十六年（一八三六）二十七年（一八四七）、承安三年（一八五八）、泰和九年

（一八六九）に物力錢の査定が完成したわけで、各次の着手は大體前回の査定の完了した年より十年目のやうである。既掲の如く泰和八年の章宗の上諭に

卿等各宜盡心、一推之後十年利害所關、苟不副所任、罪當不輕

とあるのも上述の如き事實を言つたものであらう。然しこの略十年に一推したことに就ては必ずしも、非難がなかつたわけではない。通檢推排には

張汝弼、梁肅奏、天下民戸通檢既定、設有產物移易、自應隨業輸納、至於浮財、須有增耗、貧者自貧、富者自富、似不必屢推排也、上曰、宰執家多有新富者、故皆不願也、肅對曰、如臣者能推排中都物力、臣以嘗爲南使、先自添物力錢至六十餘貫、視其他奉使無如臣多者、但小民無知法出姦生、數動搖則易駭、如唐宋及遼時或三二十年不測通比則有之、頻歲推排似爲難爾、

とある。張汝弼、梁肅の如き高級漢人政治家も唐宋遼にその例なく、頻繁なる推排の民衆を擾駭せしむる恐ありとした。然し世宗は宰執家多く新富の者あるが故に推排に反對するのだと言つて居る。然し金の各次の

推排は大體當時の人民の經濟狀態の變遷より要請されたもので、初より十年一推と固定して居たのではないやうである。通檢推排は大定四年の時のことを記して

金國初占籍之後、大定四年承正隆師旅之餘、民之貧富變更、賦役不均、世宗下詔曰、粵自國初有司常行大比于今四十年矣、正隆時兵役並興、調發無度、富者今貧不能自存、版籍所無者今爲富室而猶幸免、是用遣信臣泰寧軍節度使張弘信等十三人分路通檢天下物力而差定之、以革前弊俾元元無不均之嘆、以稱朕意とある。國初占籍してから既に長年月を経、殊に海陵正隆の外征により兵役、調發限度なく、貧富の變易が著しかつたので、差調負擔の均衡を失すること甚しく、ために通檢の必要が痛感されるに至つて居た。大定十五年の推排に就ては、

上以天下物力自通檢以來十餘年、貧富變易賦調輕重不均、遣濟南尹梁肅等二十六人分路推排、

とあり、前回の通檢より十年程の間に矢張り貧富が變易し、賦調負擔の輕重が均衡を得ざるに至り、既に推排の必要が起つて居たやうである。承安二年十月の推

排に際しては

勅令議通檢、宰臣奏曰、大定二十七年通檢後距今已十年、舊戶貧弱者衆、儼遲更定恐致流亡、遂定制、已典賣物業止隨物推收、析戶異居者許令別籍、戶絕及困弱者減免、新強者詳審增之、云々

とあつて、推排の必要は既に差し迫つて居たことが知られる。張汝礪傳（卷一〇七）の貞祐四年の彼の上奏に

國朝自大定通檢後、十年一推物力、惟其貴簡靜而重勞民耳、

とあつて、十年一推は寧ろ妥當な年度であつたと見るべきであらう。通檢推排には

承安元年尙書省奏、是年九月當推排、以有故不克、詔以冬已深比事畢恐妨農作、乃權止之

とあつて、これによると農閑期に入らんとする九月頃着手した推排が、翌年の農作の始らんとする頃までかゝることが推せられると共に、金室は人民の農作を妨げるのを恐れて推排の時期に就ても充分考慮を加へて居たことは察せられる。張汝礪の承安二年六月頃の上言の中に

年前十月嘗舉行推排之法、尋以臨時而止、誠知聖上愛民之深也、

とあるのは右の記事と相應するものであらう。

補註

① 金史卷四六、食貨志一戸口に

凡没入官良人隸官籍監爲監戸、没入官奴婢隸太府監爲官戸、
とある。

② 通檢推排には、章宗大定二十九年六月のところに

命農民如有積粟、毋充物力錢慳之、

とあり、明昌三年八月には

勅尙書省、百姓當豐稔之時不務積貯、一遇凶饑輒有阻飢、何法可使民重穀而多積也、宰臣對曰、二十九年已詔農民能積粟免充物力、
とある。

③ 通檢推排には

明昌元年四月刑部郎中路伯達等言、民地已納稅、又通定物力、比之浮財所出差役是爲重併也、遂詳酌民地定物力、減十之二、

とあり、更に同明昌三年八月のところにも前述の如き積粟獎勵のことを記した後に

明昌初命民之物力與地土通推者亦減十分之二、此固其術也、
とある。金の田稅に關しては租賦(卷四七)序に

金制官地輪租、私田輪稅、租之制不傳、大率分田之等爲九而差次之、夏稅畝取三合、秋稅畝取五升、又納結一束、束十有五斤、夏稅六月止八月、秋稅十月止十二月、爲初中末三限、州三百里外紓其期一月、
とある。土地の等第稅法の定められたのは物力通檢の完成した大定五年である。世宗紀(卷六)同年十一月のところに

癸亥立諸路通檢地土等第稅法

とあり、通檢推排同年のところにも同様の記事がある。

④ 戸口(卷四六)のところには

京府州縣、郭下則置坊正、村社隨戶衆寡爲鄉、置里正以按比戸口催督賦役勸課農桑、村社三百戸以上則設主首四人、二百以上三人、五十戸以上二人、以下一人、以佐里正禁察非違、置壯丁以佐首巡警盜賊、……
とある。この主首の願直も亦免役錢として村社の富民に負擔させたのであらうか、

⑤ 註として、大定二十九年章宗嘗欲罷坊正、里正復以主首遠入城應代妨農不便、乃以有物力謹愿者二年一更代、とある

⑥ 輪庸錢に就ては宣宗紀(卷一四)貞祐三年夏四月に

丙午以調度不給、凡隨朝六品以下官及承應人罷其從已入力輪庸錢

とあり、又百官志四(卷五八)百官俸給のところにも同様の記事がある。

⑦ 錢弊貞祐四年四月のところには

又河北寶券以不許行于河南、由是愈滯、宰臣謂、昨以河北寶券商旅費敗繼踵南渡、遂致物價翔踊、乃權宜限以路分、今鼎既以本路用度繁殷欲徵軍須錢、宜從所請、若陝西可徵與否、詔令行省議定而後行、とある。

⑧ 章宗初頃の制によると大鈔は一貫、二貫、三貫、四貫、五貫、少鈔は一百、二百、三百、四百、五百各等である。

⑨ 錢幣(卷四八)にも同様の記事がある。

⑩ 明昌元年中都路の被水災戸を推排した時、その減額物力錢を尙書戸部が奏上して居る(通檢推排)

⑪ 會寧府(上京路)、遼陽府(東京路)、大定府(北京路)、大同府(西京路)、開封府(南京路)は五京として各京留守司一員が置かれ、これが本府尹を帶び本路兵馬都總管を兼ねした。首府たる中都路の大興府尹に就ては特別規定があり、その大興縣、宛平縣は赤縣として特別待遇を受けた。

府尹が兵馬都總管を兼ねせるものは、咸平府(咸平路)、臨潢府(北京路)、河間府(河北東路)、眞定府(河北西路)、益都府(山東東路)、東平府(山東西路)、大名府(大名路)、太原府(河東北路)、平陽府(河東南路)、京兆府(京兆路)、鳳翔府(鳳翔路)、延安府(鄜延路)、慶陽府(慶原路)、臨洮府(臨洮路)等の他に曷懶路及び婆速府に於ても尹が本路兵馬都總管を兼ねて居た。

⑫ 通檢推排には大定四年のところに遺信臣泰寧軍節度使張弘信等十三人分路通檢天下物力とあるが、世宗紀には泰

寧軍節度使張弘信等二十四人分路通檢諸路物力とある。⑬ この時の任命に關しては高汝礪傳にも見えて居るが通檢推排には次の如く記されて居る。

於是令吏部尙書賈執剛、吏部侍郎高汝礪先推排在都兩警巡院示爲諸路法、每路差官一員、命提刑司官一員副之承安三年九月奏、十三路繕定推排物力錢、

章宗紀(卷十)には承安二年冬十月壬午のところに尙書省行推排とあるのみである。

⑭ 通檢推排には次の如く記されて居る。

泰和八年九月以吏部尙書賈守謙、知濟南府事蒲察張家奴、莒州刺史完顏百嘉、南京路轉運使宋元吉等十三員分路同本路按察司官一員推排諸路

完顏百嘉傳(卷一〇〇)には詔與按察官俱推排物力召見于香閣、大安中、とあり、賈益(守)謙傳(二〇六)にもこの任命に就て記され、その時の章宗の詔も收められて居る。

⑮ 張大節傳(卷九七)には

擢修內司使、推排東京路戶籍、人服其平、

とあり、又楊伯元傳(卷九七)にも

伯元以才幹多被委任、凡兩爲推排定課使、累爲審錄官人稱其平、

とあり、贊には

閻公貞定金律令、楊伯元定金推排、人皆以平稱之難矣、とある。